

心の復興に向かつて①震災時に見たイーハトーブ

イーハトーブ。岩手県の詩人・宮澤賢治は、自らの心の中に描く理想郷をかう表現しました。「雨ニモマケズ」といふ有名な詩があります。人間が自然や動植物、人間同士を大切に生きていくための理想的な姿勢の一つが、この詩の中で表現されてゐるやうに思ひます。

三年前の三月十一日、東日本大震災が発生。私の故郷である岩手・陸前高田市もまた、壊滅的な被害に遭いました。当時、祖父が宮司を務めて

ゐた本務社の月山神社と、そこからやや離れて建つ実家には、氏子など合はせて二百五十人ほどが避難。男性は行方不明者の捜索や夜警を、女性は炊出しと家族を捜しての避難所回りをおこなつてゐました。さらに、子供たちは十手でフキノトウを集め、天ぷらにして夕食に一品添へるなど

積極的にお手伝ひ。お年寄りたちは若いお母さんたちのために、手拭ひなどを縫ひ合はせて生理用品の代用品を作るなど、長年の知恵で支へます。それぞれが誰かの役に立とう

と助け合ひ、必要以上のものをほしからず生活をしてゐました。一方、神社本庁の職員だった私は震災から約一週間後、岩手県神社庁からの救援依頼を受け、本庁の先遣として救援物資を運ぶこととなりました。この時、都内もあらゆる物資が滞りてゐましたが、本庁職員が一人となり、東京都神社庁などの協力も戴きながら、トラックの手配から食糧・飲料・衣服・手回し充電器等の物資の確保まで、関係者の間を奔走して準備しました。私を先遣

高橋 知明

こもれび

に選んで戴いた本庁の皆様にも感謝してゐます。救援物資を運んで岩手に到着した頃、すでに神社庁では被災地への物資搬送と情報収集をおこなつてゐました。すぐさま私も物資を小分けにして、実家のある沿岸部方面へと向かひました。覚悟はしてゐたもののやはり果てた故郷の風景にわが目を疑ひながら、まだ水浸しの部分もある道を進みました。それは、自然の猛威には人間の力は到底及ばないといふことを、改めて心に刻む体験となりました。

私の実家の家族は、避難所となった当時の神社の状況こそ「イーハトーブ」であった

のではないかと、後に語つてゐます。あの時に見た地元の人々の目は、悲壮感どころか、何とかしなくてはといふ使命感に輝いてゐたやうに思ひます。震災直後、東北の人々は難局を乗り越えるためにそれぞれができることはなにかを最大限に考へ、助け合ひ、世界の人々から称讃されるほどの行動をしました。さらに全国の人々が節電や支援活動などに積極的に協力したのは、災害大国に生きる国民として

の覚悟ある自然発生的行動だったと感じます。しかしながら、人間は忘れ易く、深い動物でもありません。震災の教訓から助け合ひや感謝の精神が見直される一方、支援を受けつつ日常生活を徐々に取り戻す中で、不足を知ることを忘れ、周囲を顧みることなく必要以上に物や補償を求める人々が出てきたことも事実です。その時から、私は次に何をすべきか悩むやうになってゐました。

たかはし・ともあき

公益財団法人 瓦礫を活かす森の長城プロジェクト事務局

